

# 質的心理学研究

第12号

【特集】

## 文化と発達

Japanese Journal of Qualitative Psychology

2013/No.12

 日本質的心理学会  
Japanese Association of Qualitative Psychology

[発売]  
新曜社

# 目次

巻頭言 能智正博「“最前線”の声を聴く」

## 特集：文化と発達

(責任編集委員：柴山真琴・田中共子)

- 奥西有理・田中共子 .....6  
地域国際交流の場におけるホストファミリーの異文化接触対応スタイル  
—— 自然発生的な文化学習類型の探索
- ビアルケ（當山）千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋 登 .....24  
バイリンガル児はどのように二言語で読書をするようになるのか  
—— 読書文化の世代間における伝達過程
- 山本登志哉 .....44  
文化の本質的な曖昧さと実体性について  
—— 差の文化心理学の視点から文化を規定する

## 一般論文

- 廣瀬文章・辻本昌弘 .....66  
地域社会における伝統の継承
- 池谷 彩 .....82  
他者との関係の中で生成する「精神障害」経験と自己のありよう  
—— 精神障害者地域作業所での聞き取りから

## 文化の本質的な曖昧さと実体性について — 差の文化心理学の視点から文化を規定する

山本登志哉 中国政法大学社会学学院

Toshiya Yamamoto School of Sociology, China University of Political Science and Law

### 要約

「文化現象」という対象を研究するにあたって、我々はいくつかの理論的困難に出会ってきた。この理論論文の中で我々は、比較文化心理学と文化心理学という文化に関わる心理学の両者が、個人と文化集団の関係を理論的に理解するときに、どうしても直面してしまう困難について検討することを試み、それを明らかにした。その困難の最も重要な点は、文化集団というものが、その外延も内包も明確に定義できない、という著しい曖昧さを持っているながら、それと同時に人間としての発達や我々の日常の社会生活に対して極めて大きな影響力を持っている、固定的な実体としても我々の前に現れるという矛盾した性格である。この困難な問題に対して、我々は現在新たに展開中である「差の文化心理学」の視点から、文化現象のこの矛盾した性質を理解する新たな理論的道筋を示し、さらには「拡張された媒介構造」(EMS)という我々の概念を用いてそれらを分析する新たな方法を提起した。

### キーワード

文化の曖昧さ、文化の実体性、差の文化心理学、拡張された媒介構造 (EMS)、文化集団の存在論

### Title

**Ambiguity and Substantiality as Essential Nature of Culture: Redefinition of Culture from the Perspectives of "Cultural Psychology of Difference"**

### Abstract

When we study cultural phenomena, we will encounter an important theoretical difficulty. In this theoretical paper, we clarified the difficulty that both cross-cultural psychology and cultural psychology have faced when they understand theoretically the relationship between individual and cultural group. The most critical point of the difficulty is the paradoxical nature of cultural group that it appears simultaneously both as ambiguous object of which the intension and extension cannot be defined clearly, and as rigid substance which have heavy influence to human development and our daily social life. Based on the viewpoint of "Cultural Psychology of Difference", we have shown the new theoretical way to understand the paradoxical nature of the cultural phenomena, and set up original method of analyzing them with our concept of "Expanded Mediation Structure" (EMS).

### Key words

ambiguity of culture, substantiality of culture, cultural psychology of difference, expanded mediational structure (EMS), ontology of cultural group

本稿の課題
-------

文化についての様々な議論や定義がある中で、そもそも「果たして文化というものが実際に存在しているのだろうか？」という問いは、それらの議論、定義の前提に関わる素朴で、だからこそ深刻なものだろう。もしも「文化という実体は無い」ということになれば、喩えてみれば、文化を研究するという行為は、実体のない幽霊を研究するようなものではないのか。

もし文化が幽霊のように実体のないものだとすれば、文化研究は対象の実在性や事実性を直接問わずに、ただ理解や信念を問う物語り研究の一種としては、質的心理学研究になじみの対象（山本，2007）と言えるかもしれない。そしてそれは確かに文化を心理学的に研究する上で必要な視点のひとつである。

石黒（2010）はさらに踏み込んで文化概念の脆弱性を指摘し、「人の心と行為の研究に於いて実践と社会という言葉ほどには、その言語にリアリティや必然性を感じない」とし、さらに文化概念が「何か抽象的な実体を指すもののように感じられることを怖れる」と文化を積極的に実体化して語ることの危険性を述べる（石黒，2010，p.148）。指摘の通り文化の安易で恣意的な実体化は様々な社会的不幸をも生み出さう。では我々は文化それ自体の実体性については積極的に語らず、文化語りの研究にとどめるべきであろうか。

しかし世界各地に見いだされる深刻な文化間対立や文化圏を移ったときの異文化不適應などの現象を見ても、文化が人々の生命さえ左右するように我々の前に頑強な「実体」として現れ、否応なくそれへの対応を迫るという現実を覆い隠すべくもない（異文化理解の難しさが当事者間にどれほどの傷を継続して生み出さうか、たとえば伊藤・山本（2011）を参照されたい）。

文化がそのように深刻な形で社会的に生きる人々の実践を現に左右しているとき、我々が成すべき仕事のひとつは、なぜ文化が「概念的脆弱性」を抱えているのに、それほど力を持って実体のように現れるのかを心理学的に解明することではないだろうか。もう一歩踏み込んで言えば、人間が社会・歴史・文化的に生

きるとき、役割意識や所属集団、帰属文化を含む社会的アイデンティティの形成とその生き方は切り離せないはずである。その意味で文化的アイデンティティに関する問いは心理学的文化研究のひとつの核心でもある。そのとき文化という現象を、その事実性や実在性の問題を置き去りにして論じることはできない。それゆえ文化は幽霊だろうか、それとももっと明確な何らかの実体だろうか、あるいはそのいずれにも解消されない何かなのだろうかと改めて問わずにおれないのである。

もしも文化の存在が幽霊のようなものであって、せいぜいが個人の語りまたは共同語り研究の対象にとどまるに過ぎないとすれば、文化を実体化して独立変数と見なすこれまでの多くの比較文化的研究は果たしてまともな研究の名に値するだろうか？あるいは心はそれ自体が文化であるという文化心理学は、心は幽霊であると言っているに過ぎないのではないか。逆にもしそれが実体だというならば、ではどこにどんな意味でその文化という名の実体は「実在」していることになるのだろうか。

一見言葉のお遊びにも見えるかもしれない、しかしまともに考えるほどに深刻さを増すこの問題に、誤魔化しを含まずどう心理学が正面から取り組むことができるのか。ここでは「拡張された媒介構造（Expanded Mediation Structure: EMS）」概念（Yamamoto & Takahashi, 2007）および「ディスコミュニケーション」研究（山本・高木 2011；山本，2011）の議論をベースに、比較文化心理学と文化心理学の異なる視点を受け止めつつ山本らが提起する「差の文化心理学」（Cultural Psychology of Difference）」（Yamamoto, Takahashi, Sato, Oh, Takeo, & Pian, 2012）の理論からその課題に取り組む。上記諸研究では文化を心理学的に論ずるにあたっての基本概念や基本論理構造を整理してきたが、本論考ではそれらの基本について必要最小限の解説をした上で、現在の文化に関する心理学諸理論が共通して抱える難問を個と集団の二元論的固定化と実体化というアポリアから明らかにし、かつそれらを我々の概念・論理構成から乗り越える道を提示することを目的とする。それは我々心理学者が「文化を研究する」とは何をどうすることなのかについて、ある結論を出すことであり、またそれは他領域の文化研究

と心理学的文化研究の関係を再整理する手がかりにもなるだろう。

以下、まずはその課題をより明確にするために、これまで文化に関わる心理学が作ってきた基本的な2つの理論的立場をごく簡単に整理し、その両者の差異を説明した上で、そのいずれもが抱えている共通の理論的困難を明らかにする。次に「差の文化心理学」がその難問をどのように処理しようとしているかを説明し、「社会・歴史・文化的な存在としての人間」に心理学が心理学の立場からどう迫ることができるかについて、新たな視点を提起していきたい。

### 曖昧で実体的という矛盾

## 1 文化に関わる2つの心理学

文化に関わる近代の心理学の展開を見ると、主として2つの異質な立場をそこに見いだすことができる。まず一方で実証主義的実験心理学の流れからの比較文化心理学的諸研究がある。実験心理学の祖とされるヴント自身は実は同時にそれとは異質な原理を持ち、文化心理学ともつながる面を持つ「民族心理学」にも力を入れていた(Wertsch, 2004/1991; サトウ・高砂, 2003)。しかしその後の実証主義的心理学は彼の前者の部分のみを普遍性を持つ心理学として展開させ、文化に関わる後者についてはそれに従属させて、普遍(一般)心理学に対する応用心理学の位置に落とし込んでいく。ここで「心」とは人類に共通の普遍的しくみを先天的に持ちながら、後天的に与えられた環境要因の影響を受けて、個別化するものと見なされる(北山, 1998)。文化はその後天的な環境要因のひとつであり、だからこそ、この系列に属する比較文化心理学的研究は一般心理学にとって単に応用分野のひとつに過ぎないこととなった。この立場では心の文化的な部分は、すなわち人間すべてにそれが通用することはないという意味で普遍性を持たないということと同義にもなる(Matsumoto, 2001/2000)。

他方でこのような系列の心理学的研究を根底から批判する議論として、ヴィゴツキーに始まり、現在「文

化心理学」(Cole, 2002/1996; 柏木・北山・東, 1997)や「社会文化心理学」(Valsiner & Rosa, 2007)等として展開している一連の研究が存在する。その理論的視点の元では、心は社会から切り離されて個体内部に成立する抽象的なシステムではなく、それ自体が本質的に歴史的で社会的なものであり、あるいは「心はそれ自体が文化」であると見なされる(Vygotsky, 1978; Engeström, 1999/1987; Cole, 2002/1996; Wertch, 2004/1991; 石黒・亀田, 2010)。その議論のポイントは、他の動物種とは異なる人間精神の構造的な特徴を、言語活動に象徴されるような「媒体」を用いた媒介性に見いだす点にある(ヴィゴツキー, 2006)。

その構造を可能にしている「媒体」は人間の社会・歴史・文化的な集団的活動の中で形成されたものであって、個々人はその「媒体」を利用して初めて人間としての精神活動を可能にすると思なされる。当然そこに形成される精神は、本質的に具体的で社会・歴史・文化的なものであり、超歴史的・超社会文化的で抽象的な普遍的な一般心理ではない。そのような個別具体性を伴う文化性をその生成過程から構造的に持つことこそが人間心理の普遍性なのである。

このように文化を心にとっての外的変数と考えるか、あるいはその本質的な属性と捉えるかという根本的な視座の置き方で両者は全く異なっている。だがそのどちらの視座を重視するかは、その研究者が「何を明らかにしたいのか」という研究テーマに依存する、多分に相対的な問題である。今ここで我々にとって重要なこととは、両者の優劣を考えるのではなく、そのどちらの視点にも共有されていると思われる、共通の理論的難題を明らかにすることである。

## 2 共通する難題

この両者に共通する問題点を理解するために、両者が「文化集団」をどのように把握しようとしているかを簡単に整理してみよう。

まず両者共に「文化」を個人の現象として見るのではなく、何らかの意味で集団に関わり、集団に共有された現象と見ることが暗黙の前提になっている。ある個体が示す心理現象が他者には見られず、ただ特定の個体のみに見られる現象であれば、それは普通「文化

的現象」ではなく、「個性的現象」と見なされる。文化現象は、ある限定された範囲の集団に共有されたものと見なされる点で両者は同じである。

異なるのは、そこで出発点に想定された集団の範囲である。文化心理学にとって第Ⅰに問題になるのは、現生物種に限定して言えばホモサピエンスサピエンス（ヒト）という動物種の集団全体である。ホモ属の進化の中で、特にこのヒトという種が他の動物種の集団に対して独自の精神構造（とりわけ記号やツールによる媒介的構造）を決定的に進化させ、その文化性はヒト以外の種とヒトを区別する本質的な特徴と見なされる。それゆえ、仮にある研究が「文化差」を問題にしていなくても、それがヒトに特徴的な媒介構造を明らかにするものならば、立派に文化研究となる（たとえば上野の状況的学習に関する研究とそれへの佐伯の評価：上野，1997；佐伯，1997）。これに対して比較文化心理学はそのようなヒトの精神の普遍的構造の問題については一般心理学に議論を預け、ヒトという種が作り出している様々な集団間の文化差の問題に議論を限定し、その特性を明らかにすることを目的とする。

その両者の視点の差を前提にしてであるが、文化心理学系の研究も比較文化心理学と同様に、ヒトという種の集団間文化差に対しても関心を示してきた。たとえばヴィゴツキーと共に活躍したルリヤは前近代的文化と近代的文化の対象分類の構造差を問題とし（Luria, 1976/1930s, 1971）、スクリプナーやコールラも読み書きの非近代的方法での獲得者と近代的教育による獲得者を非獲得者とを比較し、同じ文字という道具の修得文脈や用法の差がもたらす認知能力の差を論じた（Scribner & Cole, 1981）。また政治学・歴史学・社会学・教育学など多領域で昔から問題とされてきた集団主義 VS 個人主義という文化比較の軸は、心理学的研究の中でも議論を生み続けてきた（Triandis, 2002/1995；高野，2008）。北山やマーカスはこの集団主義 VS 個人主義の問題を、自己観という一種の心理システムの構造的差異の問題に翻案して論じてきたが（Markus & Kitayama, 1991；北山，1998 他）、その北山も自らの議論を文化心理学の流れに位置づける（北山，1997）。また筆者らが行った日中韓越お小遣い研究（高橋・山本，印刷中）に参加し、親子システム、子の友人システムの変容を単なる単線成長ではない形

で捉えようとしたサトウらの TEM 理論（サトウ，2009）も、文化差を人生で可能な複線径路の差異として説明するが、やはり文化心理学の流れの中に位置づけられ、また理論化されている（Sato, Yasuda, Kido, Arakawa, Mizoguchi, & Valsiner, 2007）。

このように、文化を心理現象のどの水準に位置づけるかに違いがありつつも、いずれの立場からも「文化差」の問題に向き合う研究が存在する。そのとき研究者はその文化差の背後にそれを担うなんらかの人々の集団を暗黙の内に想定している点は同じである。ではそのような文化差の主体としての「文化集団」とは何なのか、と改めて問い返してみる意味がここに出てくる。そしてそのときに両者は同じ困難に出会う。ではその困難とは何だろうか。

以下では「本来境界が曖昧で揺れ動く文化集団を固定化してしまう」こと、そして「個人と集団という 2 つの要素（主体）間の関係を説明する際、両者は本当は存在レベルが違い、同列に論じられないのに、無理に同一平面で関係づけるため、両者を二元論的に実体化する理論的誤りが生ずる」ことの問題について論じていく。

### 3 文化集団と個人の関係

上述の通り、それがもし個人にのみ特徴的な現象であれば個性の問題として扱われ、すなわち文化という現象は個人には還元できない。このことは個人を越えた集団システムとして文化を社会的に分析するのではなく、認知人類学のように個人の内部の認知的スキーマから個人化して分析する立場でも同様になる（福井，1984 等）。ある行為や思考のスキーマの「所有者」が仮に個人であったとしても、それが文化的スキーマとして見なされるのは、そのスキーマが一定範囲の人々に共有されると想定されているからである。

ここで「文化集団」と「個人」という 2 つのキー概念を取り上げよう。まず前提として、それが上述の文化的スキーマであれ、集団に共通または分散的に共有された文化の慣習（北山，2010）や人生の複線径路であれ、「文化的なもの」が個人の中で文化集団と無関係に生まれるものでないことは明らかである。だとすれば両者にはどのような関係があるのか。

もし文化間比較の心理学的研究に一般的なように、ここで文化を外的な独立変数と割り切れれば、それを担う文化集団は個人から切り離されて個人に作用する独立した実体とみなされるが、同時に早速問題が起こる。まず素朴に考えて現実の人間集団は個人によって作られ、個人を切り離して中空に浮いた実体ではない。そこで文化集団は個人からなるが、それはシステム化して個から独立した実体となり、集団内の個はそれに従属する、と理解して問題回避を図ったとする。だがそこで仮定された文化集団の内包（何を基準として当該文化の要件を確定するか）も外延（時間的に、また空間的に、成員的に、どこでその集団は線引き可能なのか）も予め精確に定義することは困難で、境界線も不明瞭に実体化された文化集団が、具体的にどう個人に作用するのかが見えにくくなっていく。

実際、現実の文化差を心理学的に問題にする研究ではこの問題は曖昧にされ、民族名や居住域、国籍などの「常識的」な概念で機械的に調査対象を選定し、その結果分析についてはその曖昧な「サンプルデータ」の概略的傾向として比較する以上のことは困難である（ただしこのような手法の研究自体は否定されず、目的に応じて必要とされる。ただそういう各調査手法の性格をふまえたデータの解釈や多面的分析（高橋・山本、印刷中）が重要になる）。

さらにこのように文化集団を個人から切り離すと、個人は集団から一方的に文化化される存在となり、文化のダイナミックな変容と個人の活動の関係を見え難くする。特に個人の心をそれ自体文化と考え、「文化集団」と「個人」を切り離さない文化心理学にとって、両者の関係をどう理解するかは研究者を悩ます理論的課題となる。たとえば箕浦（1997, 2007）は文化研究において「マクロ（社会・文化環境）とマイクロ（個人の心身発達）をいかにつなぐか」を問い、次のように考える。個人が発達過程で他者との相互作用を通して社会・文化が形成してきた文化的意味体系を、自分に合わせて修得する。そのように文化化された（文化の衣をまとった）個人が、他者との相互作用の中でその文化的意味体系を再生産し、また状況に合わせて能動的に改変して新たなマクロを生成する。そのように両者の間に相互作用ともいえる関係を見ることで、文化を固定化せずにダイナミズムの中で理解する道を探

るのである。同種の説明はロゴフの議論（Rogoff, 2006/2003）にも見いだされる。

北山は文化心理学が集団（文化・集合的プロセス）と個人（心理・個人的プロセス）を非二元論的に把握するものであると主張し（北山, 1997, p.24）、両者を厳密に二分することができないと述べてつ（北山・増田, 1997, p.111; 北山, 1998, p.182）、文化心理学の課題はこの「相互に構成し合う全体の2つの側面」（北山, 1998, p.20）としての両者の「相互構成過程」を明らかにすることだと主張する。彼のキー概念である「自己観」については、それを個人の中にあるものとも、集団が所有するものとも、どちらとも言い難い微妙な位置に置くことで、なんとかこの二元論を回避しようとしているようにも見える（北山・増田, 1997, p.111, 掲載図5-1）。

だが、箕浦やロゴフの議論にせよ北山の議論にせよ、文化集団と個人の関係は相互に切り離された独立のものとして見なされてこそいないものの、相互に影響を与え合い、または構成し合うという意味で、両者がある種の主体的な存在として語っている点は同じである。だがここで問題はその主体が成り立つ存在論的レベルの差である。この点でたとえば箕浦の議論では、異なる文化の衣を着た個人が、異質な人々との関係に入る図を描く際には、文化間葛藤や文化変容を非二元論的に個人主体間の「相互作用」として論じているが、その社会に共有された「文化的意味体系」は、個人間の関係の外部に押し出されて描かれている（箕浦, 1997, p.57, 掲載図3-2; 箕浦 2007）。このとき、文化的意味体系と個人それぞれがどのように主体的に影響し合うのかが必ずしも明瞭ではなく、その限りで文化集団を個人と同列に素朴に実体化する二元論的議論から十分に脱却したと見なせるかに疑問を残す。

この問題は文化集団と個人に限らず、集団と個人の二元論の問題に一般化されると思われるが、その観点で活動理論の第三世代になるエンゲストローム（Engeström, 1999/1987）の議論を見た場合、彼はヴィゴツキーが論じた個人の精神の媒介構造（ヴィゴツキーの三角形）を、社会的な生産・実践（活動）を成り立たせている集団の媒介構造へと拡張した（拡張された三角形）。その結果、当該の図には「主体＝道具＝対象」という個人レベルの要素と「ルール＝共同体

＝分業」といった集団レベルの要素という異質な要素が同一平面上に配置されたが、そこで両者の異質さがどのように統合され、関係づけられているのかは明示されない。「主体はルールを媒介に共同体を構成する」といった程度の説明的な関係以上の表現をそこに読みとるのは著者には難しい。さらにここでもこの三角形の背後に、ある明確な輪郭を持った「集団」が研究に先立つ実体的与件として無前提に承認されているように思われる。つまりエンゲストロームの構図では、個体と集団の間にある存在論上の困難な理論的問題が（おそらくは意図的に）素通りされているように見える。

#### 4 個と集団の存在論

さて、ここまで個と文化集団の関係に関連するいくつかの心理学的議論を例示しつつ、そのいずれもが「文化集団」を暗黙裏に素朴に実体化する議論から脱し切れているように思われないこと、それを個と切り離れた独立の何かと捉える視点からは、個の活動によって文化が変容していくダイナミズムが捉えられず、仮に文化を個との関係でダイナミックに変容していくものとして見る視点を重視する場合でも、個とは異なるレベルの主体であるはずの「文化集団」は心理学的にはどういう対象を指し示すのが明確とは言えないか、あるいは無前提に与件化されることを指摘した。

つまりこれらの議論に一貫して欠けているか、あるいは十分展開されずに残されていると思われる重要な問題は、個と文化集団の間にある存在論的な性格<sup>2)</sup>の違いについての検討である。個も集団も、我々に対してある種の主体として現れうることを承認したとしても、その主体としての現れ方は両者で全く異質である。そこで次に両主体の現れ方の違いを「個人からの見え方」から見てみよう。

ある個人が我々の目の前に主体として現れるとき、その個人の輪郭、あるいは境界線は通常比較的明確な形で現れる。その境界線は皮膚によって区切られる場合も、衣服や杖などを含めて区切られる場合も（James, 1890; Bateson, 1990/1972, 邦訳 p.609）、それ以上の領域性を持って区切られる場合もあり（James, 1890; 山本, 2003b）、自我という主体をその所有対象

にまで延長して理解する場合にはむしろ境界の曖昧化の問題が本質的に重要になるが（山本, 1995, 1996, 2003b）、ひとつの身体に頭部を2つ持つ結合双生児などの例を除き、少なくとも生物学的な視点で皮膚境界にまで個人領域を限定すれば、「他者」との境界をその都度画定することは通常困難ではない。

同様に「文化集団が目の前に主体として現れる」という状況を想像してみよう。我々が異文化体験をするその瞬間に、果たして目の前に「文化集団」という「主体」が明瞭な輪郭を持って見えているだろうか？もちろん海外に出て一人その街角に佇んだとき、周囲の人々はみな異質な文化を持つ人々の集団である、と見える状況は確実にある。だがそれは周囲の人々が皆異質な文化集団の成員の集まりである、と見える事態であり「その集合体それ自体が文化集団である」ということではない。文化集団自体は目に見えている人々を越えて広がっている。にもかかわらず、ではそれがどこまで広がっていてどこで境界を引けるのかということは、「国籍」や「国境」といった本来文化概念とは異質な基準によって機械的に（したがって妥当性を欠く形で便宜的に）決めなければ、明瞭になり得ない。

我々が実際に体験するのはあくまでその文化集団に属すると見える「人々」であって、文化集団そのものを直接我々は目で体験することはない。その意味で個人の異文化との「相互作用」は常に具体的な個人（複数の相手である場合を含む）との相互作用でしかあり得ず、我々はその相手という具体的個人を通して、その背後に彼／彼女が属し、「自らとは異なる文化を持った人々の集団」の存在を感じてしまう、という形でしか文化集団は現れ得ない。

もちろん上に明瞭な境界線を持つものとして描いた「個人」にしても、分析の視点を変えればその単一の主体性はある意味で幻想に過ぎないという見方も可能である。それは特異な働きを持つ脳も含め、生物学的には多様な臓器という、それ自体がある種の主体性を持ったもの同士が複雑に関連し合いながら作り上げる複合的システムとしても見られる。さらに臓器は細胞に、細胞は分子に、分子は原子に、原子は素粒子に、という形でそれぞれをより基本的な要素間のシステムの関係として還元的に語り直すことは可能であり、また目的とする研究の文脈に応じていずれも必要であ



る。逆にデュルケームの古典的な議論など、社会学にしばしば見られるように個人を集団に還元し、それを集団という一つの主体性を持ったシステムに従属する要素として分析したり、集団間の関係を分析したりすることも可能であり、かつ文脈に応じ必要である。

すなわちここで「個人」にすべてを還元して主体を説明したり、逆に「集団」に還元したりすること自体に意味があるとは思えない。さらに上記のように個と集団では主体の現れ方が根本的に異なり、そのどちらに足場を置くかによって、当然論の整理の仕方も変わる。大事なのが自分がどのレベルに足場を置いてそれぞれの関係を論ずるか、ということに自覚的であることであり、それらの違いを曖昧化して個人と集団の関係を論ずるとき、困難が生まれる。

## 5 二元論的実体化と集団の与件化

まとめると、我々が現在文化に絡む現象を心理学的に研究する際に直面している理論的な困難は次のような点にあると思われる。

第1に、文化集団と個人を無理につなぐことは、喻えてみれば顔とその構成部分である目の間に相互作用や相互構成的関係を考えるようなものである。それは理論的に異なる概念レベルの対象を同一平面で無理矢理つなげるカテゴリーミステイクを犯すことになり、その結果異なる概念レベルで異質な実体的主体として扱われるべき両者を、同一レベルで二元論的に実体化することになる。そして第2に、文化集団の境界線は本来極めて曖昧で多義・多重的、可動的であり、それを前提に個人と文化集団の関係について理論化を図るべきところ、現状では文化集団を結果として個人から切り離し、素朴に与件化して固定化してしまう議論を越えるのが難しい。

既述のように生活者としての我々にとって、文化間の差異は深刻な文化摩擦といった現象の中で極めてリアルで切実に体験されている。ところがいざそれを研究し、とりわけ個人と文化の関係を考えようとすると、細かく突き詰めるほどに「文化集団」の境界線は曖昧化し、個々の文化は実体のない単なる幻想にしか見えなくなってしまう。この矛盾をどう解くか、ということ、個人と文化集団という概念の異質性を見失わず

に、両者の関係を理論的に整理し直す作業が深く関係してくる。それが本稿後半の課題となる。

先行の議論では、北山（1998）は西洋近代哲学が足場とした主客二元論について根本から問い直す西田（1911）など、日本的または東洋的と北山が見る視点を既存の心理学に対置させて自らの理論の意義を論じた。また箕浦（2009）はバイリンガルのアイデンティティ研究を論ずるにあたり、現象学までを含む近代哲学のパラダイムを総検証してそれに代わる「世界の共同主観的存在構造」を論ずる廣松（1972, 1988）の議論を取り上げつつ、改めて「本質主義と構築主義」の対立という問題から理論的に検討し直そうとした。ワーチもまた「精神機能」と「社会文化的環境」など、人間の行為への多面的な見方のいずれかに論を還元するのではない、「中間に身を置く方法」を模索する（Wertsch, 2002/1998, 邦訳 p.17）。

なぜこれらの論者が文化と個人を扱う自らの理論を深めようとする過程で、旧来の研究が常識としてきた足場をわざわざ崩し、その概念構造を構築し直す議論を試みざるを得ないのか。それは我々が現在直面している理論上の困難が、欧米近代に代表される二元論、中でも個と集団の二元論の強い伝統を心理学が今もなかなか相対化できないことによると考えれば理解しやすい。文化集団の暗黙の与件化も、そのような伝統的視点の結果として生み出されてしまうものであろう。事の成否は置くとしても、上記の議論はそれら二元論がもたらす困難を脱却する試みの一部と筆者には思えるのである。

## 6 個と文化集団の二元論的実体化を越えるために

以上の検討から、我々が解決すべき課題として以下が浮かび上がる。

異文化間相互理解の問題にもつながる文化差の問題は、単に人間の社会的生き方のバリエーションを理解する博物学的な興味対象となるばかりではない。現にその「差」を理由として大小様々な対立の発生や、「文化間移動」に伴う適応や相互調整といった現実的な問題を絶え間なく我々に投げかけている実践的な課題でもある。

そしてこの実践的課題に取り組もうとするとき、文

化やそれを担うものとしての文化集団を、個を越えた固定的な実体としてスタティックに見る視点は、現に文化ないし文化集団というものがダイナミックに揺れ動いて見えるのだから妥当性を欠き不適切である。同時にそのような実体化は、文化間移動する個人が移動先の固定的文化に一方的に適応すべきとのみ思われやすくなること、また文化集団内部でも個人は単に文化の受動的な学習主体として見られてしまい、個人の能動的な活動が文化および文化集団を常に変動させていく面を見失わせること、「文化集団」間の対立を固定化し先鋭化させることなど、実践的にも問題を生む。

とはいえ個と集団の間にダイナミックな相互作用や相互構成過程を見る議論もまた、両者の間に存在する存在論的な性格の差の問題を十分に論ずることがなければ、やはり旧来の二元論を引きずるものとなり、個から切り離されずにどう集団が実体化していくのかが見えてこない。我々は文化集団が上記のような曖昧さや変動性といった捉え難さを持ちながらも、一種の実体的な主体として我々個人に作用し、また我々がそれに作用し返していくように思える現象を有効に記述できる方法を、改めて作り直す必要がある。

以下、その作業を試みるが、その際、次のような視点が前提としてとりわけ重要視される。まず第1に、我々は心理学的に現象を分析する立場に立ち、したがってその出発点となる分析の焦点は個人の水準に置かれ、そこに存在論的に異質な「集団」という主体概念を直接持ち込むことはしない。ただしここで個人はあくまでも「その都度関係的に生成する主体」であり、個人はその都度置かれた文脈から独立に存在する固定的な主体ではない。

第2に、我々はそのような主体を含む関係性を「媒介構造」として記述する。その際ヒトという種に本質的な社会的な媒介構造に不可欠な構成要素として、主体間を媒介する「規範的媒介項 (normative mediator)」を重視し、それを含む社会的行為の最小分析単位を「拡張された媒介構造 (Expanded Medial Structure : EMS)」と名付けて概念化する。

第3に、文化差を、相互作用する主体(個人)間で「規範的媒介項のズレ」の認識が発生するという現象から説明する。そのようなズレの認識がその都度生成することによって文化差は実体化され、文化集団は

「機能的に実体化 (functionally substantialized)」される。したがって文化集団の実体性は物理的対象の実体性とは本質的に異なり、「誰がそれを機能的に実体化しているか」という主体の能動的な視点の作用と切り離して一般的に理解し得ないことになる。

第4に物理的対象についての認識が形成される過程とは異なり、文化比較の研究では、一般の生活者と同様に自分自身の意味世界に生きている研究者が、それを足場に他者の意味世界とのズレを自覚し、そこから文化差の認識を生み出していく。それゆえそのようなズレ(差)の認識から始まる文化研究も、各研究者の持つ具体的な意味世界の違いに依存して多様な現れ方をするため、文化は研究者の視点から独立に物のような単一の固定的実体としては析出されないことになる。同様に文化集団もまたそれを語る差の文脈に応じてその外延や内包が変動する。

第5にそのように生成する規範的意味づけの認識は、それを生成した主体の社会的な実践を再構造化していく。その意味で文化の認識や文化集団の認識の形成は、スタティックな対象認識とは異なり、主体の社会的行為や社会的アイデンティティをダイナミックに方向付ける認識上の社会的実践として理解される。文化集団の機能的実体化はそのような認識実践とともに成立する。

第6に文化認識が個人個人の文化実践を規定し、それによって文化を機能的に実体化していくものであるとすれば、文化は常に「誰かの認識実践として現れる」ものであり、逆に言えばその文化はそれを認識していない他者に対しては現れず、文化としては機能しないことを意味する。文化の実体性はあくまで認識主体に依存し、具体的主体抜きに一般的には論じられないものである。「その文化は誰に対して現れ、機能し、その文化実践が(当該文化を認識しない人々を含めた)周囲にどのように影響するか」と考えるのが文化現象を問うときに適切なスタンスである。

総じて文化集団の認識は、人が他者との相互作用の中で自らの社会的な行為を各々構造化していく過程で、実体的なものとして生成し機能させていくと理解される。それは物質的対象のような固定的実体性を持たず、それが生成される文脈に応じて外延も内包も変動する曖昧さを本質的な属性とすると見なされることになる。

以下、これらの論点を具体的に述べていくことにする。

## 文化集団の存在論を再構築する

### 1 分析単位としての EMS

集団（群れ）を作る、という生き方は広汎な動物種に見いだされるが、その一種であるヒトという種の著しい特徴は、集団の内部での交換や集団間での交易が生存に不可欠な行為となっていることである。資源の交換と交易は個体間や集団間の分業体制を可能にし、生産から消費に至る複雑な社会構造を可能にする。さらに集団内部や集団間の資源の広汎な分配行為もヒトに特徴的なものだが、配分を巡る力関係の調整システムとして権力構造が発達しそれを可能にする。他の動物種における順位制といった権力関係は、資源獲得の優先順位を決めるが、群れ内部の資源の再分配には関わらない。交換的行動は遺伝的規定性の大きな配偶行動など限定的な場面で確認されるのみで、特に順位制集団では交換ではなく上位個体による一方的な収奪が当然となる（山本, 1991）。

ヒトに特徴的な交換という行動は他児との交渉行動の一部として、個体発生的には2歳前後から身振りや言葉かけを伴いつつ幼児のやりとりの中に自然発生的に成立し始め、少なくともその発生形態や発生時期（発達段階）について日本の京都と中国の北京のデータに大きな違いはない（山本・張, 1997）。園のクラス集団内部での資源の配分関係も比較的平等で、たとえ1歳台の子どもであっても順位制を形成して不平等配分が安定的に構造化されることはない点も「和の社会」と言われる日本の京都と、歴史的に激しい「競争社会」であり続けた中国北京のデータに違いはない（山本, 1997, 2006）。

ところが他児が占有する玩具等について、それを「相手の意志を確認してから（相手に断ってから）獲得しようとするか」という点で両者を比較すると、すでに1歳後半ごろから両者に明瞭な差が見いだされ始め、北京で得られたデータではお互いに何も言わずに自由に使い合う傾向が強く、その傾向は大人にまで一

貫して続く。逆に京都で得られたデータでは「まず相手の了承を得てから」獲得するという原則が3歳ですでに相互作用の前提となっており（ただしからかいやいじめなど、その「意図的逸脱」は起こる：山本, 1997, 2004）、同様の行動パターン之差が日中の成人間のやりとりの中でカルチャーショック体験を生む場合もある（山本, 1995, 1996, 2004）。

すなわち、研究者の視点から見たとき、資源を交換しながら生きるというヒトに特徴的な行動の萌芽は2歳前後に発生する点で「文化差」は見いだされないにもかかわらず、「相手の支配下にある資源をどのように獲得しようとするか」という点ですでに1歳半以降という早期から、統計的有意差を得られる程度に明瞭な差が確認され、しかもその差の内容は日中の大人の間でしばしば体験される「文化差」にそのまま対応している。ではなぜこの時期にこの種の社会行動に明瞭な「文化差」が現れるのだろうか。

その理由は子どもの自然観察から明らかになる。それ以前の子どもはやりとりの相手の反応には注目をし、玩具の奪い合いや他児の攻撃などを行うが、この時期から子どもは自分と他児の相互作用について、当事者だけでなく、第三者でありかつ子どもにとっては権力者でもある「大人」がどう評価するかを気にし出すのである（山本, 1997, 2000）。したがって大人が気にしないやりとりは続行され、大人に否定的に評価される行動は抑制されていく、という形で結果的に大人の社会的行為の基準が子どもに取り込まれることになり、さらに3歳になるまでには大人がその場になくても、子どもたち自身がそのような第三者的基準に基づいて関係調整を行うようになる（三極構造の形成：山本, 2000）。

拡張された媒介構造（図1）は、このような「文化差」を成立させる子どもの発達の变化を理論的に整理する作業（山本, 1997）の延長に、さらに日中韓越の研究者と共同して行われた各国の小学生から親までを対象とする「お小遣い」現象についての研究（高橋・山本, 印刷中）の中で、ヒトの社会的コミュニケーション行動の基本単位を表現するものとして概念化されていったものである。

図1は、主体Aが対象a（身振りや言葉、物）を媒体として主体Bに働きかけ、主体Bは対象aの中に

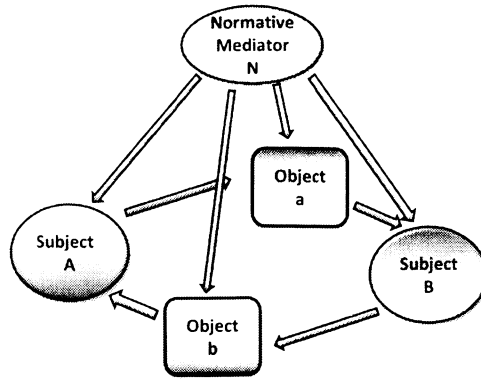


図1 拡張された媒介構造 (EMS)  
(Yamamoto et al., in press を改変)

主体 A の働きかけの意図を読み取りつつ (主体 A の意図に媒介されつつ), 対象 b を媒体として主体 A に働きかけ返し, さらに主体 A は対象 b に主体 B の働きかけの意図を読み取りつつ主体 B に働きかけ返すという, 会話やプレゼント交換, 売買などに典型的なやりとりがあり, さらに状況をどう解釈してどのようなやりとりすべきかを制約し, 方向付ける規範的媒介項 N によって主体とその元にある対象が媒介されている, という関係を示している (山本, 2011 ; Yamamoto & Takahashi, 2007; Yamamoto et al., 2012)。

ヴィゴツキーの三角形やワーチの「媒介手段を用いて行為する行為者 (agent-acting-with-mediational-means)」概念 (Wertsch, 2002/1998) とは異なり, さらに 2 つの主體的な要素 (agent) がここに組み込まれている。ひとつは行為する主体から行為され, あるいは行為し返してくる他者 B であり, もう一つは相互作用する両者を媒介する規範的な要素としての規範的媒介項 N である。この規範的媒介項は個体発生的には子どもの行為を方向付ける大人の主體的作用 (ただし子どもにそのように認識されたものとしての) に始まり, やがて一般性を持って主体の行動を方向付ける規範意識へと発達の抽象化していくものである (山本, 1997)。またエンゲストロームの拡張された三角形概念とは異なり, 個と個の関係とは存在論的なレベルが違う「共同体」といった異質な要素をそのうちに含み込むことなく, 文化をも視野に入れたヒトの社会的行為の分析の基本単位構造を表現するものになって

いる。

ここで EMS は独立した構成要素の加算的な結合としてではなく, それぞれの要素が相互に関係し合っその関係の中で性格づけられ, ゲシュタルト的にその都度生成するものであり, 固定化された実体ではない。また主体 A のみに事態が構造化されて見える場合も, 主体 A と B の双方にそう見える場合も, あるいは研究者など第三者的な立場からそのように見え, 当事者にはその構造が意識されない場合もあるが, それを意識することによって当該主体の行為が再構造化されて変容するため, この構造自体「誰の視点にそのように見えているか」ということと切り離して客観的に存在する単一の固定的実体として論じられない。それはあくまで社会的な実践行為の中で, 各自の視点と文脈に応じて生成し機能するものである。

## 2 ディスコミュニケーションの帰属と文化

人の行為であっても, 物的対象であっても, 美意識のような観念であっても, さらには行為の正当な手続として現れる社会制度であっても構わないが, いずれにせよある対象が「文化的」なものに見えるという現象が確かにある。このとき, 「文化的」とは何を意味しているのかと言えば, ①それが人の意図的な精神活動によって成立していると見えることであり, ②それが個々の対象が持つ個別の特徴におさまらない共通したパターン (Rogoff, 2006/2003) を持ち, その事例

として認識されることであり、③そのようなパターンを産出する人々の集団の存在が想定されることであり、④それは異なるパターンを産出する人々の集団との対比によって見いだされることである。

たとえばある弥生式土器は明らかに人が意図的に生産したものと理解され(①)、かつ類似の土器が複数存在することでそこにひとつのパターンが見いだされており(②)、そのような形式の土器を産出する集団がかつて存在したことが推定され(③)、他の生活痕の様式の特徴等と共にその人々は縄文時代とも古墳時代とも異なる質の集団を形成する人々と理解され(④)、それと対比して弥生文化の存在が考古学的事実として現代人に共有される(ただし当の「弥生人」にはその認識やアイデンティティが共有されない点は文化集団の視点・文脈依存性を考える場合に本質的に重要な論点のひとつになる:前節6の第6参照)。

また日本人が海外に行き、日本で生活しているときにはほとんど意識しなかった自分の「日本的な文化性」を強烈に意識させられるという体験は多くの人に共有されると思われるが(伊藤, 2011 など)、このときに生じていることも、異質な世界の人々の行為のパターンや観念の違いに遭遇し、その差を個性の差としては理解しきれず、所属集団の性格の違いとして考えざるを得なくなるという事態である。両者のズレは単なる個人差ではなく、「文化差」として現れる(そのような認識が当事者自身に成立して文化集団のアイデンティティを成立させる可能性があるかどうかは、ヒトと他の動物種の「文化的行動」の種差に関わる本質的な論点と考える)。

ここで重要なポイントは、明確に境界づけられた文化集団がまず存在していて、その共通属性として文化的現象が発見されるという順序は決して本来的なものではなく、逆にそれに先だって自己の常識(パターン)と異質なものと出会い、それを個性の差に帰属できないときに、その差を説明する帰属先として文化集団の存在が想定される、という順序で我々の前に文化が現れるという展開である。このとき文化集団はあくまで後付的に想定され、したがって同種経験の蓄積と共にしばしばその内容や範囲は変容もしていく。

EMSの図式を用いてこのことを説明すれば次のようになる。

我々のコミュニケーションが相対的に安定しているのは、やりとりされる媒体の意味づけや、やりとりの仕方についてのルール、そしてそのやりとりの中で主体に期待される役割といったコミュニケーション全般に関わる規範が暗黙の内に、または意識的に主体間に共有されているとみなされる状態である。図1で言えば対象aとbを媒体とする、主体AとBのやりとりを媒介する規範的媒介項Nが、安定的に生成持続している状態と言える。

なんらかの不全が生じていると見なされるディスコミュニケーション事態(山本・高木, 2011)は、この規範的媒介項Nがうまく生成機能していない状態と解釈できる。たとえば院生室にいたある韓国の留学生は、後から入ってきた日本人院生が買って来たお弁当を一人黙々と食べ始めたことにショックを受けた。これはそのような場で食事しようとする院生が「どうすべきか」ということについて、両者の規範的認識(規範的媒介項N)がうまく生成機能し、共有されていないことを現している。

このとき、そのディスコミュニケーション事態に主体A(日本人院生)が気づいて修正を図ろうとする場合、次の2つのうちどちらかの経緯をたどることになる。第1の場合では規範的媒介項NはAとBの間で安定して共有され、それ以外の要素に逸脱が生じたと思なされる場合である。つまり、AまたはBが期待された役割から逸脱した行動(やりとりの仕方)をとっているか、対象aまたはbの意味づけまたは読み取りに逸脱が生じているかである。たとえば日本人院生は、驚いている留学生に「あなたはもう食べました? ちょっと失礼して私食べますね」と一言あいさつ(期待される役割行動)すべきだったと思うかもしれない。この場合、Aが持っている規範的媒介項Nの普遍妥当性は疑いを挟まれることもなく素朴に信憑されることが普通である(図2左)。

第2は主体AとBが、それぞれの規範的媒介項に沿った形でコミュニケーションしているにもかかわらず、ディスコミュニケーション事態が継続する場合である。実際この留学生がショックを受けたのは、Aの「二人で分けて一緒に食べよう」と勧めずに一人だけで勝手に食べた、という「身勝手な冷たい行為」に対してであり、Aの理解とは別の理由からだったが、それはA

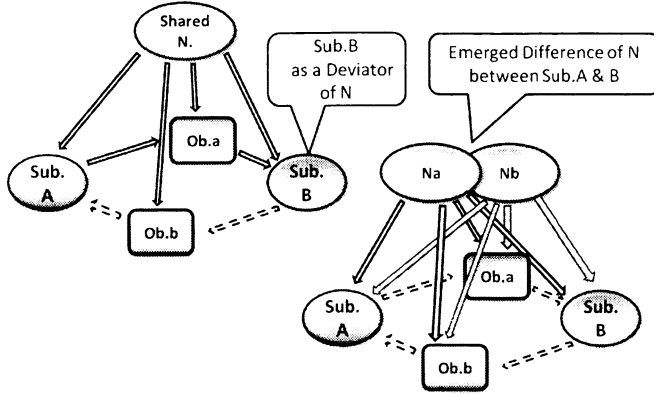


図2 ディスコミュニケーションの原因帰属の2パターン  
(Yamamoto et al., in press を改変)

の想像の外である。トラブルとしてそれが成立するときには、AもBも自らの行為の妥当性・正当性を信じて疑わず、主張が噛み合わないといった事態が生まれる。このような事態は、共有されていると素朴に信憑されていた規範的媒介項Nの内容に実はズレがあるのだと理解される。Aは規範的媒介項Naに沿い、BはNbに沿ってコミュニケーションの結果、ズレが生じるのである(図2右)。たとえば次の機会に韓国人留学生(B)が自分のために買って来た昼食を、部屋に日本人院生(A)がいるのを見つけて一緒に食べようとするが、Aは逆に驚いて遠慮して断る。断られたBはなにか自分が拒否された感じを受ける。こういった行為の規範性に関わる感覚(規範的媒介項)のズレがなんとなく気まずい雰囲気を作ったりもする。

さてここでこのようなディスコミュニケーション事態の中の規範的媒介項Naは、第三者的な視点から見れば主体Aの主観的な規範認識に過ぎない。たとえば「友人なのに一緒に分け合って食べようしないAは冷たい」という規範的感覚をBが持つのは、そのような規範的媒介項を持たない者にとっては予想外のBの主観的思いこみである。だがAにとって「自分のために買って来た分を自分一人食べるのは当たり前」という規範的媒介項はBとの間に共有され(すなわちNa=Nb、あるいはさらに広汎な人々と普遍的に共有されたN)、その意味で個を越えて通用する普遍的なものであり、Bがそれに沿って行為するのは当然と思われており、BにとってのNbもまた同様であ

る。この場合二人は自己中心的にも見えるが、通常規範は暗黙裏に自他に共有されて機能する以上、それは当事者本人には自然な理解である。だが、BがNaを意図的に逸脱したわけではなく、ただBにとって正当なNbに沿って行為していたこと(Na≠Nb)にAが気づくとき、Bとのズレは逸脱としてB個人に帰属されず、「AとNaを共有する人々」と「BとNbを共有する人々」の間の持つ共同性(個人間のつながり方)の差に帰属されることになる。つまり、上の例で言えば日本人院生は「冷たい」のではなく、日本社会で平均的な振る舞いをしているのだと見なされ、逆に韓国人留学生は「押しつけがまし」かったり「ずうずうし」かったりするのではなく、韓国的に自然な振る舞いをしていると見なされるようになる。このとき「ああ、日本人ってこうするのか」「ふーん、韓国人はそんな風にするんだね」という認識が成立し、これが「文化差」としてディスコミュニケーション事態が解釈されることであり、またそれを生み出す人々の集合体としての文化集団の認識が立ち上がることである(Yamamoto et al., 2012)。

### 3 文化認識の実践性と文化集団の機能的実体化

この視点からすると、社会化とは子どもが日々のコミュニケーション実践の中で、大人にも許容されるコミュニケーションのパターンを子どもなりに模索し、相対的に安定した規範的媒介項を反復生成していく過

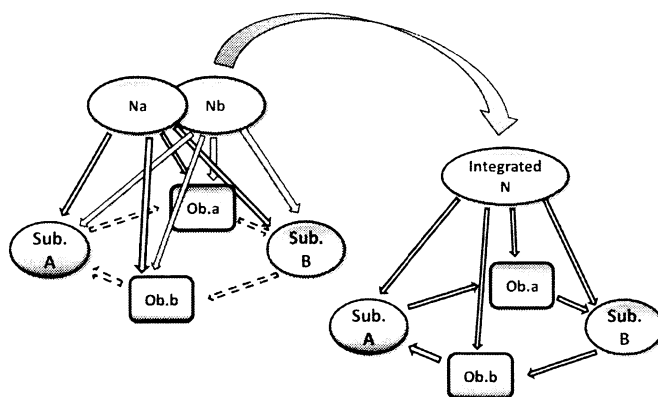


図3 規範的媒介項の統合によるディスコミュニケーション事態の解消  
(Yamamoto et al., in press を改変)

程である(山本, 2000)。このパターンが周囲の人々とのコミュニケーションを相対的に安定化させ、子どもは社会的主体として成長し、やがてそこからの一定の逸脱をも含みつつ(規範からの逸脱と遵守を反復しつつ大人から自立化していく動的な発達プロセスとしての「逸脱としての発達」: 山本・高橋・呉・竹尾, 2004; 竹尾・高橋・山本・サトウ・片・呉, 2009)「大人」となっていく。

そのように周囲の人と生成維持されたパターンが比較的均質な場合、主体はそれと異なる規範的媒介項があり得ることに気づきにくいため、そのパターンから外れた相互作用は素朴に「規範からの逸脱」と認識して矯正の対象とし、あるいは逸脱主体を自分たちとの相互作用から意識的に排除する形でディスコミュニケーション事態の修復を図る、という実践的な対処行動を取りやすい。

だがディスコミュニケーション事態の原因が規範的媒介項のズレと認識された場合はその実践的な対処行動に変化が起こる。「逸脱者」がそれでも自分の集団の一員と見なされる場合は同化圧力が発生したり、「裏切り者」として負のサンクションの対象となったりする。少数派の異質な規範的媒介項によるコミュニケーションの取り方が、多数派の安定した規範的媒介項を否定するものと受け取られ、多数派が自集団の安定性に脅威を感じるからである。

これに対して「逸脱者」が異文化集団の成員であり、異なる規範的媒介項を持つと見なされた場合は対処法

に違いが出てくる。一番シンプルなのは関係を絶つことであるが、そうでなければ相互の規範的媒介項の関係を調整する方向に進む。ここでもその方法は複数想定され、暴力を含む何らかの手段で上下関係を作り、一方の集団の規範的媒介項に他方の集団のそれを従属させる、という権力的な方向もあれば、両者の規範的媒介項のいずれにも価値を見いだした上で、両者を統合する新たな規範的媒介項を共同で模索生成していく(図3)という共生的な方向もある(山本, 2011)。

このようにディスコミュニケーション事態の発生を人が認識した場合、そこに規範的媒介項がどう関与しているかについての反省的な認識が起こり、人は自らが正当性を持つと考えるコミュニケーションパターンの方向に自他の行為(または主体の在り方)を誘導したり矯正したりするか、関係を絶つか、あるいは規範的媒介項間の差異を認めて両者の関係調整を模索するかといった実践的な課題を背負うことになる。文化認識はとりわけ後者のプロセスで個人を越えた「わたしたち」と「あなたたち」の区分を生み出し(呉, 2011)、我々の社会的な行為の形態、生き方を左右する実体的な力を持つものとして、相互作用の中で機能するようになる。そこに想定された同じ規範的媒介項を共有する人々の集団としての文化集団が、個を越えるものとして機能的に実体化して現れるのである。

このときやはり文化集団がまず確定的な輪郭を持つて主体に見えているわけではない。それはディスコミュニケーション事態の調整過程の中で、ズレの原因を

説明するものとして見いだされ、意識化されることによって逆に人々に同化や排除等の圧力を生み出し、個々人のその具体的行為によって機能的に実体化するものである。したがってそこに想定された文化集団は、その時々状況要因によって常に変動する可能性を持っており、実際にそれを認識する人の視点の違いなどによって多様な姿を現すことになる。

だがそれは決して単なる個人が勝手に作り出した空虚なイメージすなわち幻想ではない。なぜならそれは他者とのコミュニケーション実践をリアルに成り立たせ、社会システムを動かす認識なのであり、その認識によって現実に人々の間に社会的資源を巻き込んだ政治・経済・文化といった日々の社会的実践が成立するからである。それは個々人の恣意によってどうとでもなるものではなく、それなしには社会的に生存不可能であるという意味で絶対的な存在である。貨幣という文化的ツール (Yamamoto & Takahashi, 2007) が、貨幣自体の持つ価値 (紙幣の印刷代など) 以上の力を与えられるという意味では幻想的な存在であるにも関わらず、それが媒介するコミュニケーションが現実の経済を成り立たせ、日々の我々の暮らしを支え、方向付けているという事実ひとつをとっても、そのこの意味は明らかだろう。

文化集団はこのとき人の社会的生存や行為のリアルな前提条件として実体化されるが、同時にその実体性を認識する個人の視点がズレれば多様な形で (時には全く矛盾対立する形で) 現れ、時にその認識のズレに経済的利害などが絡んで民族紛争その他の社会的対立をも生み出さう。またそれは人々の認識構造と社会的実践を支える物的な条件の変化と共に変動していくものでもある。そのような意味で文化や文化集団は固定的物理的実体でもなく、単なる主観的幻想でもなく、共同主観的 (廣松, 1972) な存在と言える。

#### 4 文化の曖昧さを本質的基盤に据える意義

以上、EMS の概念およびディスコミュニケーション研究の視点から、文化集団の存在性格をどのように説明できるかについて述べてきた。ではこのような文化集団についての見方は冒頭に論じた理論的困難に対して、どのような解を与え、今後の研究にどのような

新たな可能性を提供しうるのだろうか。

「個と集団の存在論」で述べたように、文化に関わる心理学的研究がこれまで突き当たってきた大きな理論的困難は、文化が個人を越えた現象であるにもかかわらず、その主体として想定される文化集団の存在性格が不明なことであり、そこから「文化集団と個人の関係」で述べたような様々な問題が生じた。

これに対して我々は、固定された外延と内包を持つ文化集団を与件とせず、個々に展開する相互作用の中でディスコミュニケーションが発生するその現場から、規範的媒介項のズレの認識という事態の構造化によって、文化集団の認識が事後的に立ち現れること、そしてそれが主体の社会的実践行為を変容させ、その結果文化集団が共同主観的存在として機能的に実体化すると考えた。そのように事態を把握し直すことで我々は次のような文化に関わる諸矛盾 (と見える現象) を、むしろ積極的に文化の本質的な属性を現すものとして受容し直すことができ、新たな視点からこれまでの諸研究が持つ意味を定直し直すことができるだろう。

第 1 に、文化的な対象は、たとえば同じ金閣寺を日本文化の構成要素として、北山文化の構成要素として、公家文化と武家文化、および仏教文化の融合体として、あるいは中世建築文化の一事例としても見ることができるように、文化的定義はそれを語る文脈に応じて一定しないが、それはその対象が持つ共同性を見る際にどのような異質な集団との対比を考えるかという対比文脈が多様であり得るために成立する、当然の多義性として理解できる。ある現象の文化性は対比の文脈から独立には確定できないものである。

第 2 に、文化的な主体も、たとえば著者は東洋文化の主体として、日本文化の主体として、津軽文化の主体として、男性文化の担い手として、質的心理学会の文化の一員として、サッカー文化にアイデンティファイするものとして、など、多様な文化的主体として継時的にまたは同時に現れ、単一の文化主体として固定されない。これもまた主体の文化性がその時々社会的行為の文脈に応じて立ち上がるものであることから当然視されるものである。

第 3 にすでに縷々述べたように、文化集団の外延と内包は明確に規定し難い。たとえば日本文化というものはいつから存在し、その担い手は誰と誰であり、そ



の人々を日本文化の成員とする基準は何か。野球の張本勲やダルビッシュ有は日本文化の構成員か、サッカーの田中マルクス闘莉王やハーフナー＝マイクはどうか。日本国籍を持ち日本で生まれ育っているが「日本人離れ」した性格や生き方をしている人はどうか。これらはその人々が他者との間に生み出す EMS 構造の中味（規範的媒介項の内容、主体の在り方やアイデンティティ、対象の意味づけや扱い方など）やそれを語る文脈を個別に分析して相対的に論ずべきものであり、文脈抜き的一般解は存在しない。当然文化集団の境界線の曖昧さは本質的なものである。

第4に、そのような一見幻想にも思える文化集団が、我々の生活世界においては時に人の命を左右するようなリアルな実体性を持って現れ、社会的に機能している。これについては文化集団の共同主観的存在性格について述べたことで、それもまた文化現象に本質的であることは明らかであろう。個を越えた文化集団なるものは、現実には具体的に現れし相互作用する他者を通して見いだされ、その行為を通して機能的に実体化されるものであり、「文化集団」という固定的実体がある外部にあるわけではない（このような解法については廣松（1972 他）の「四肢構造」論がより一般的な理論的足場を提供している）。そしてそのように実体化されたものが人の現実的な行為に制約的に働く力を持ち、往々にして他者に対しても様々な形で強制力を働かせる（機能的に実体化する）のである。

なお、付言するならば、しばしば人類学の研究対象となってきた、周囲の集団と一定の交易関係を維持しつつも、比較的流動性が少なく、少人数で相対的に隔離された環境に生きるプリミティヴな集団では、上記の境界性の曖昧さという性格は一見減少するように思える。だがそのような集団であってすら、世代を超えるような長期的な変動や集団それ自体の融合や解体、再編成の中で生み出されるダイナミズムを見る場合には、むしろ上記のような文化の曖昧性という本質に改めて立ち戻ることになる。それは多様な民族の生成・融合・分裂・崩壊過程を見ても明らかに思える（たとえば中国の客家民族の動的生成に関する蔡の興味深い議論：蔡，2005）。

第5に、文化と集団力学あるいはポリティクスとの間に無視できない深い関係を認めつつ、かつ前者を後者

に還元しなくても良くなる。文化認識が本質的に曖昧なものであるのならば、仮にその曖昧さや人々の多様性を嫌って集団の斉一性や凝集性を高めようとするとき、多様な文化基準の中から恣意的にまたは集団力学的に選び出された基準で人々をしぼり、それに従属させることで「文化集団」を強固に実体化しようとする人々が現れるのは、事の善悪を抜きにしてひとつの流れであろう。だがそれは文化現象にとって、むしろ事後的で派生的な展開型のひとつに過ぎないのであり、基盤が曖昧さにあることに常に立ち返らなければ、おそらく冒頭で石黒が危惧を示したように、文化研究は素朴な文化本質主義によって偏ったポリティクスに巻き込まれ、集団間対立の先鋭化に与したりする。両者は密接に関係しつつ、しかし同一ではない。

だからこそ、とりわけ文化間相互理解の実践に関わるような研究に於いて、そのような「わたしたち」と「あなたたち」を区分するポリティクスに研究者自身巻き込まれること抜きに研究実践を深められないにもかかわらず、そこを足場に単純な文化本質主義を越えた異文化間対話過程を導き出す試みも可能になる（呉，2011；石下・水口・渡辺・楊，2012 他）。

#### おわりに——差の文化心理学の射程

以上、文化を差の立ち現れから分析する我々の「差の文化心理学」の視点を基盤として、文化集団の持つ曖昧性を文化の本質的屬性として積極的に捉え直すことの意義について述べてきたが、そのことは実際の研究においては次のような利点をもたらすと思われる。

第1に、比較文化的な研究はこれまでのサンプリングに関する困難な議論から解放され、たった一事例のインタビューに対する質的分析からも成り立つことになる。なぜなら上記の議論から導かれるように、文化の研究とはある固定的な集団の特性を探る研究、という狭い位置づけを離れ、個々人がある文脈の中でどのような共同性（EMS の内容に現れる）を生成しつつ周囲の人々と生きているか、その質を分析するという問題に位置づけ直されるからである。この際のインタビューの共同性はインタビュアーの持つ共同性との

差異への気づきから見いだされるが (Yamamoto et al., 2012), そこで見いだされた彼／彼女の示す共同性が、実際にどの程度の人々と共有されるか、彼／彼女の周囲の人々の中で多数派を占めるか否か、といった問題はその議論の後に派生的に出てくる問題になり、それは事例の積み重ねや質問紙調査などで別途検討すればよい。そして実際彼／彼女の生活空間の中でそれが少数派であったとしても、それはそれでその人の共同性を現す文化的な「生きるかたち」(浜田, 2009) に他ならない。逆に言えば集団は多かれ少なかれ常に差異を持った個性的な人々のコミュニケーションによって成立するものであり、ある固定的で斉一的なパターンのみではなく、むしろその多様性の中のダイナミズムを明らかにすることの方が、よりリアルに文化現象を捉える道になる。たった一事例の丁寧な分析はそのために不可欠の出発点ともなる。

第2に、文化現象を共同主観的な個人の見えから捉え返すことで、確定した境界性を持つ固定的集団の枠組みから解き放つことにより、不安定に現れては消えるような現象、常に変化しつつ展開する現象、境界が全く不明な現象に接近する可能性が得られることである。会社組織にせよ、国民国家組織にせよ、境界を人為的に明確化した集団によって主導される世界の在り方はすでに大きく変容し、ネット社会は国境線を含むあらゆる境界線を曖昧化しつつ、常に離合集散しながら揺れ動く「集団的なもの(ネットワーク)」を生み出しながら展開している。そのような動きが作り出す「文化現象」を対象にしようとする場合、「文化集団と個人の関係」の項で指摘したような、固定的な集団枠を想定した旧来の研究はサンプリング段階から困惑するだろう。今後の研究において我々はもう一度個人間の共同性とその周囲の人々との個別的つながり方に着目することから出発し直す必要がある。

第3に、比較的境界線も明確で、よく組織され、個を越えた実体として具体的に把握可能な集団と見なされていたものを、改めて個の活動のレベルからも(したがって心理学になじみ深い方法で)記述し直す多元的な道が見えてくる。集団の集団としての動きが、その構成要素である個人の個々の動きの単なる積み重ねではないこと、そこに個と個がゲシュタルト的に構造化されて全体の動きが生成するのであり、個に集団を

還元できないということはここで前提として承認する。にもかかわらず、逆にそのようにゲシュタルト化された構造の中で、複雑な媒介構造の一部として個は成立し、その中でそれなりの主体性を発揮し個人としてコミュニケーションするときに組織は初めて機能する。そのリアリティに迫る道である。次に具体的例を示してみよう。

議論を簡単にするためにシンプルな階層構造を持つ中央集権的な会社組織のような集団を想定して説明してみよう(図4)。この図はEMS構造を形成しつつ相互作用する主体同士が、係長などの上司を規範的媒介項(関係の調整機関)として受け入れながら、各部署で行っている、という構造の上に、今度は係長がさらにひとつ上の上司(課長)を規範的媒介項と見なし、それに調整されながら行為する、といった関係の積み重なりを模式的に示している。

最下層に位置する平社員にとって、係長から伝達される「会社の方針」はそれがどのように生成するかを見ることのできない不可視の領域(雲の上)からいわば「天の声」として降りてくることになり、そこで「会社」という存在を具体的な個人の身体を持たない抽象的実体としてイメージしたとしても不思議ではない。だがその「天の声」は実際には図のようなEMSの積み重ねの中で、相互に影響されながら、最終的には最上部のEMS(取締役会など)を構成する主体のとても「人間くさい」コミュニケーションの中で決定されていくものである。注意すべきはその主体が単なる個人としてではなく、いずれもこれらの会社組織に複雑に積み重なったEMSに媒介される形で成立した特別な役割性を持つ個人として、すなわちあくまで関係的に生成する主体としてコミュニケーションしていることだが、そのことを前提とした上で、「天の声」という、個を越えた主体の作用の形成過程を、個の活動レベルから記述分析し直すことが可能になるのである(このような階層性を持ったコミュニケーションによる単声的な集団的意思の形成プロセスを分析した例としては、山本(2003a, 2008)がある)。

第4にそれは硬直した異文化集団間対立に対して、それを柔軟な関係に組み替えるためにこれからの新たな模索の可能性を提供する。なぜならば、「集団間」の対立を、その「実体性」のリアリティを消すことな

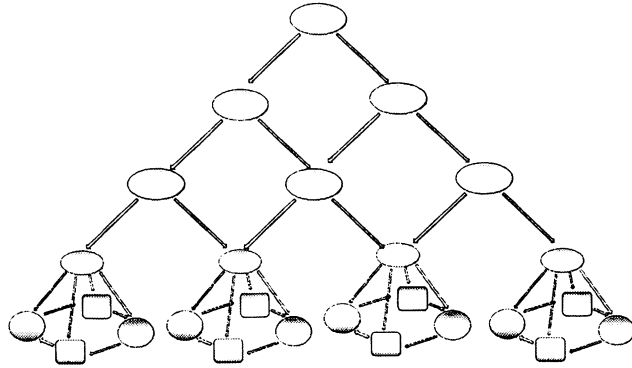


図 4 階層化された EMS としての組織  
(2 段目以降は見やすさのため対象項を省略)

く改めて「個人間」のコミュニケーションの視点から捉え直し、そこに働きかける対話実践的な視点を提供するのである（山本・姜，2011；伊藤・山本，2011；呉，2011；石下他，2012）。そのような視点の展開によって，集団間の固定的対立関係として硬直的にみなされていたものが，改めて個々の具体的コミュニケーションに解きほぐされることになる。そしてそこに新たな柔軟な共同可能性が模索され，その模索が新たな文化間関係の創造的な機能的実体化を生み出していくことで，新しい共同性が展望されることになる。それは単なる観念的な理想ではなく，国境線を越えて展開するネットワーク社会という新たな現実世界に足場を持つものでもあると考えられるのである。

以上，心理学的な文化研究について，個と集団に関するひとつの存在論的理解に基づいた視座を理論的に検討してきた。最後にここで述べた EMS 概念は，それ自体が研究者間の研究というコミュニケーション実践のひとつの媒体として，その都度生み出される性格のものであり，文脈抜きに実体化され得ないものであること（山本，2011）を強調して本稿を閉じたい。

注

- 1) 『実体』として現れる」という表現は「実体となる」ということではなく、「あたかも物理的実体であるか

のように，私たちに体験され，働きかけてくる」ということを意味する。物象化（廣松，1972）のひとつとも言える。本稿では後述の「機能的実体化」の概念によって説明される。

- 2) 心はどう働くか，対象はどう認識されるか，といった認識論的な議論に対し，「存在論」という言葉は心理学の領域では必ずしもなじみの深い概念ではないと思われる。「心とは何か」「心とはどのような存在か」という問いは，むしろ積極的に避けられるのが常ではないだろうか。しかしながら，西洋近代哲学的な認識論の枠組みに限定されず，とりわけ生成的な視点から新たな心理学の領域を切り開こうとするとき，どうしてもこの「存在論」の問題に立ち入って議論をせざるを得ない（たとえば以下の議論を参照； Sánchez, & Loredo, 2009; Branco, 2009; Loredo, & Sánchez, 2012; Yamamoto, 2012）。ここでは心あるいは文化という存在を単なる物体に還元するのではなく，物体から切り離された精神的実体として抽象化するのでなく，それらの二元論的議論の地平を離れて（Yamamoto, 2012）共同主観的に（廣松，1972）生成し，機能的に実体化する存在として理解し，議論を進める。

引用文献

ペイトソン, G. (1990). 精神の生態学 (佐藤良明, 訳). 東京: 思索社. (Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. New York: Ballantine Books.)  
Branco, U. A. (2009). Why dichotomies can be misleading while dualities fit the analysis of complex phenomena.

- Integrative Psychological and Behavioral Sciences*, 43, 350-355.
- 蔡驊. (2005). 江河流域の地域文化と客家——漢族の多様性と一体性に関する一考察. 東京: 風響社.
- コール, M. (2002). 文化心理学——発達・認知・活動への文化—歴史的アプローチ (天野清, 訳). 東京: 新曜社. (Cole, M. (1996). *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge, Mass.: London, England: Belknap Press of Harvard University Press)
- エンゲストローム, Y. (1999). 拡張による学習——活動理論からのアプローチ (山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登, 訳). 東京: 新曜社. (Engeström, Y. (1987). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit Oy.)
- 福井勝義. (1984). 認識人類学. 綾部恒雄 (編), 文化人類学 15 の理論 (pp.219-241). 東京: 中央公論社 (中公新書).
- 浜田寿美男. (2009). 障害と子どもたちの生きるかたち. 東京: 岩波書店 (現代岩波文庫).
- 廣松渉. (1972). 世界の共同主観的存在構造. 東京: 勁草書房.
- 廣松渉. (1988). 新哲学入門. 東京: 岩波書店 (岩波新書).
- 石黒広昭. (2010). 実践としての文化——文化に対する社会歴史的アプローチ. 石黒広昭・亀田達也 (編), 文化と実践——心の本質的社会性を問う (pp.107-158). 東京: 新曜社.
- 石黒広昭・亀田達也 (編). (2010). 文化と実践——心の本質的社会性を問う. 東京: 新曜社.
- 石下景教・水ロー久・渡辺忠温・楊傑川. (2012). 対話型授業実践による日中集団間異文化理解の試み. 中国語教育学会・高等学校中国語教育研究会合同大会発表資料.
- 伊藤哲司. (2011). まえがき. 伊藤哲司・山本登志哉 (編), 日韓傷ついた関係の修復——円卓シネマが紡ぎ出す新しい対話の世界 2 (pp.1-11). 京都: 北大路書房.
- 伊藤哲司・山本登志哉 (編). (2011). 日韓傷ついた関係の修復——円卓シネマが紡ぎ出す新しい対話の世界 2. 京都: 北大路書房.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology. Vol.1*. New York: Henry Holt.
- 柏木恵子・北山忍・東洋 (編). (1997). 文化心理学——理論と実証. 東京: 東京大学出版会.
- 北山忍. (1997). 文化心理学とは何か. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編), 文化心理学——理論と実証 (pp.17-43). 東京: 東京大学出版会.
- 北山忍. (1998). 自己と感情——文化心理学による問いかけ. 東京: 共立出版.
- 北山忍. (2010). 社会・行動科学のフロンティア——新たな開拓史にむけて. 石黒広昭・亀田達也 (編), 文化と実践——心の本質的社会性を問う (pp.199-244). 東京: 新曜社.
- 北山忍・増田貴彦. (1997). 社会的認識の文化的媒介モデル. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編), 文化心理学——理論と実証 (pp.109-127). 東京: 東京大学出版会.
- Loredo-Narciandi J. C., & Sánchez-González J. C. (2012). Neither dichotomies nor dualisms: Simply genesis. *Integrative Psychological and Behavioral Sciences*, 46, 410-423. doi: 10.1007/s12124-012-9193-z
- ルリヤ, A. R. (1976). 認識の史的発達 (森岡修一, 訳). 東京: 明治図書出版. (Luria, A. R. (1930s). *Об историческом развитии позн авяательных процессов*)
- Luria, A. R. (1971). Towards the problem of the historical nature of psychological processes. *International Journal of Psychology*, 6, 259-272.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- マツモト, D. (2001). 文化と心理学——比較文化心理学入門 (南雅彦・佐藤公代, 監訳). 京都: 北大路書房. (Matsumoto, D. (2000). *Culture and psychology: People around the world*. Belmont, Calif.: Wadsworth.)
- 箕浦康子. (1997). 文化心理学における〈意味〉. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編), 文化心理学——理論と実証 (pp.44-63). 東京: 東京大学出版会.
- 箕浦康子. (2007). マイクロとマクロをどうつなぐか? . 発達心理学会第 18 回大会研究交流委員会企画シンポジウム「多文化共生への道——在日外国人を巡る教育, 制度, 文化, そして相互理解」(発表資料).
- 箕浦康子. (2009). 本質主義と構築主義——バイリンガルのアイデンティティ研究をするために. 母語・継承語・バイリンガル教育研究大会発表資料. <http://www.mhb.jp/2009MHBMinoura.pdf> (情報取得 2010/12/17)
- 西田幾多郎. (1911). 善の研究. 東京: 弘道館.
- 呉宣児. (2011). 異文化理解における対の構造のなかでの多声性——お小遣いインタビューでみられる揺れと安定を通して. 山本登志哉・高木光太郎 (編), ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち (pp.49-70). 東京: 東京大学出版会.
- ロゴフ, B. (2006). 文化的営みとしての発達——個人, 世代, コミュニティ (當眞千賀子, 訳). 東京: 新曜

- 社. (Rogoff, B. (2003). *The cultural nature of human development*. New York: Oxford University Press.)
- 佐伯胖. (1997). 「文化」の心理学か, 「文化的」心理学か. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編), *文化心理学——理論と実証* (pp.293-300). 東京: 東京大学出版会.
- Sánchez, J. C., & Loredó, J. C. (2009). Constructivisms from a genetic point of view: A critical classification of current tendencies. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 43, 332-349. doi: 10.1007/s12124-009-9091-1
- サトウタツヤ (編著). (2009). *TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを覆う研究を目指して*. 東京: 誠信書房.
- サトウタツヤ・高砂美樹. (2003). *流れを読む心理学史——世界と日本の心理学*. 東京: 有斐閣.
- Sato, T., Yasuda, Y., Kido, A., Arakawa, A., Mizoguchi, H., & Valsiner, J. (2007). Sampling reconsidered: Ideographic science and the analysis of personal life trajectories. In Y. Valsiner, & A. Rosa (Eds.). *The Cambridge handbook of sociocultural psychology* (pp.82-106). New York: Cambridge University Press.
- Scribner, S., & Cole, M. (1981). *The psychology of literacy*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 高橋登・山本登志哉 (編). (印刷中). *子どもとお金——文化を生きる子ども達*. 東京: 東京大学出版会.
- 高野陽太郎. (2008). 「集団主義」という錯覚——日本人論の思い違いとその由来. 東京: 新曜社.
- 竹尾和子・高橋登・山本登志哉・サトウタツヤ・片成男・呉宣兒. (2009). お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達的变化. *発達心理学研究*, 20, 406-418.
- トリアンディス, H. C. (2002). 個人主義と集団主義——2つのレンズを通して読み解く文化 (神山貴弥・藤原武弘, 編訳). 京都: 北大路書房. (Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder: Westview Press, Inc.)
- 上野直樹. (1971). 状況的学習——旋盤による金属加工と機械修理の技術. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編), *文化心理学——理論と実証* (pp.261-278). 東京: 東京大学出版会.
- Valsiner, J., & Rosa, A. (Eds.). (2007). *The Cambridge handbook of sociocultural psychology*. New York: Cambridge University Press.
- Vygotsky, L. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological process*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- ヴィゴツキー, L. (2006). 記号としての文化——発達心理学と芸術心理学 (柳町裕子・高柳聡子, 訳). 東京: 水声社.
- ワーチ, J. (2004). 心の声——媒介された行為への社会文化的アプローチ (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子, 訳). 東京: 福村出版. (Wertsch, J. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- ワーチ, J. (2002). 行為としての心 (佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子, 訳). 京都: 北大路書房. (Wertsch, J. (1998). *Mind as action*. New York; Oxford: Oxford University Press.)
- 山本登志哉. (1991). 幼児期に於ける「先占の尊重」原則の形成とその機能: 所有の個体発生をめぐって, *教育心理学研究*, 39, 122-132.
- 山本登志哉. (1995). パンを食べる心理学——リアリティーの根拠と〈資源〉の意味づけられ方. *ら・るな*, 2, 106-113.
- 山本登志哉. (1996). 身体を越えて伸びる自我の話. *ら・るな*, 3, 114-119.
- 山本登志哉. (1997). 嬰幼兒“所有”行為与其認知結構的発達——日中跨文化比較研究 (博士論文). 北京师范大学研究生院児童心理研究所.
- 山本登志哉. (2000). 群れ始める子どもたち——自律的集団と三極構造. 岡本夏木・麻生武 (編), *年齢の心理学* (pp.103-142). 京都: ミネルヴァ書房.
- 山本登志哉 (編). (2003a). *生み出された物語——目撃証言・記憶の変容・冤罪に心理学はどこまで迫れるか* (法と心理学会叢書1). 京都: 北大路書房.
- 山本登志哉. (2003b). 所有と身体. 根ヶ山光一・川野健治 (編), *身体から発達を読み解く* (pp.91-93). 東京: 新曜社.
- 山本登志哉. (2004). 文化の中で子どもが育つということ. 無藤隆・麻生武 (編), *教育心理学* (pp.120-128). 京都: 北大路書房.
- 山本登志哉. (2006). 中国の1歳児クラスにおける所有関係——ヒトの幼児集団は順位制に従うか. *法と心理*, 5, 91-98.
- 山本登志哉. (2007). 供述の分析: 構造的ディスコミュニケーション分析を例に. 能智正博・川野健治 (編), *はじめての質的研究法——臨床・社会編* (pp.122-148). 東京: 東京図書.
- 山本登志哉. (2008). 供述に於ける語りとその外部——体験の共同化と「事実」を巡って. サトウタツヤ・南博文 (編), *質的心理学講座第3巻: 社会と場所の経験* (pp.105-130). 東京: 東京大学出版会.
- 山本登志哉. (2011). ディスコミュニケーション分析の意味——拡張された媒介構造 (EMS) の視点から. 山本登志哉・高木光太郎 (編), *ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち* (pp.213-

246). 東京：東京大学出版会.

- Yamamoto, T. (2012). Genesis and intersubjectivity: Levels of mediation. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 46, 424-429. doi: 10.1007/s12124-012-9204-0
- 山本登志哉・張日昇. (1997). 一歳半到二歳半嬰兒交渉行為与交換性行為的形成——中日嬰幼兒所有行為的結構及其發展研究之一. *心理科学*, 20 (4), 318-323.
- 山本登志哉・姜英敏. (2011). ズレの展開としての文化間対話. 山本登志哉・高木光太郎 (編). *ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち* (pp.17-48). 東京：東京大学出版会.
- 山本登志哉・高木光太郎 (編). (2011). *ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち*. 東京：東京大学出版会.
- Yamamoto, T., & Takahashi, N. (2007). Money as a cultural tool mediating personal relationships: Child development of exchange and possession, In J. Valsiner & A. Rosa (Eds.). *Cambridge handbook of sociocultural psychology* (pp.508-523). New York: Cambridge University Press.
- 山本登志哉・高橋登・呉宣児・竹尾和子. (2004). お金をめぐる子どもの生活世界 (3) ——大阪の子どもは友達同士のお金の融通をどう思うのか. *日本発達心理学会第15回大会発表論文集*, 391-395.
- Yamamoto, T., Takahashi, N., Sato, T., Oh, S., Takeo, K., & Pian, C. (2012). How can we understand interactions mediated by money as a cultural tool: From the perspectives of "Cultural Psychology of Difference." In J. Valsiner (Ed.), *Oxford handbook of culture and psychology*. New York: Oxford University Press.

## 謝 辞

本稿の作成にあたり、渡辺忠温先生（中国人民大学）、高橋登先生（大阪教育大学）、サトウタツヤ先生（立命館大学）、呉宣児先生（共愛学園前橋国際大学）、竹尾和子先生（東京理科大学）、片成男先生（中国政法大学）には特にお世話になりました。記して感謝いたします。

(2011.10.25 受稿, 2012.12.19 受理)